

演劇史研究資料：トマス・プラッターが見た俳優たち

—1598～1599年：アヴィニョン、バルセロナ、パリ、ロンドン—

戸口民也

はじめに

トマス・プラッター（2世）Thomas II Platter についてはすでに紹介したことがあるが⁽¹⁾、改めて取り上げることにしたのは、エマニュエル・ル・ロワ・ラデュリ監修による『プラッターの世紀』全3巻が刊行されたからである。

- Emmanuel Le Roy Ladurie, *Le Siècle des Platter 1499-1628, Tome I Le mendiant et professeur*, Paris, Fayard, 1995.
- Emmanuel Le Roy Ladurie (Présenté par), *Le voyage de Thomas Platter 1595-1599 (Le Siècle des Platter II)*, Texte traduit par Emmanuel Le Roy Ladurie et Francine-Dominique Liechtenhan, Introduction et commentaire historique par Emmanuel Le Roy Ladurie, Paris, Fayard, 2000.
- Emmanuel Le Roy Ladurie (Présenté par), *L'Europe de Thomas Platter : France, Angleterre, Pays-Bas 1599-1600 (Le Siècle des Platter III)*, Texte traduit par Emmanuel Le Roy Ladurie et Francine-Dominique Liechtenhan, Introduction, commentaire historique et notes par Emmanuel Le Roy Ladurie, Postface de Francine-Dominique Liechtenhan, Paris, Fayard, 2006.

『プラッターの世紀』の主人公はプラッター家三代一初代である父トマス Thomas⁽²⁾ (1499-1582)、トマスとその最初の妻とのあいだに生まれた息子フェーリクス Felix (1536-1614)、そして老境に入った父トマスと二度目の妻とのあいだに生まれた息子トマス Thomas (1574-1628) の3人である。第1巻では父トマスと息子フェーリクスの親子二代の物語が伝記風に展開される。父トマスは極貧のうちに幼少年期を送り、山羊飼いや放浪学生の生活を経て、綱造りの職人として働くようになる。そして厳しい労働の傍らギリシア語やヘブライ語を学び、紆余曲折を経てバーゼル Basel (フランス語ではバール Bâle) に居を定め、そこで印刷業者と教授を兼ねるようになる。やがて城のギムナジウムの校長となり、「そこで多くの高位の人々の子弟を教育し、多くの博士や学者、所領の領民や所領を支配する貴族の子弟や裁判所の判事や市参事会員となった者たちを育てたのである⁽³⁾。」息子フェーリクスは1552年から57年までフランスのモンペリエ Montpellier 大学で医学を学び、バーゼルに戻ったあと博士の学位を取得し、やがて医学教授、バーゼル市専属医師となる。

もう一人の息子トマスのことは第1巻の最後に簡単に触れられるに過ぎないが、彼も兄フェーリクスと同様、モンペリエに行って医学を学び、バーゼルに戻った後は大学医学部教授から学部長、さらには総長となった。『プラッターの世紀』第2巻と第3巻にはこの息子トマスの旅行記が収められている。これは彼がモンペリエに向かう旅にはじまり、学業を終えて故郷のバーゼルに帰るまで、

1595年から1600年のあいだに訪れたスペイン、フランス、ネーデルランド、イギリス各地のさまざまな様相を観察し綴った記録である。

この旅行記の中には、1598年10月から12月にかけてアヴィニオンに滞在した折に見たイタリア人劇団のこと、1599年1月末から2月初めにかけて訪れたバルセロナで見た劇のこと、1599年8月にパリで見たヴァルラン・ル・コント Valleran Le Conte 劇団の芝居や観客のこと、1599年9月にロンドンで見た劇のことなどが書かれている。フランス・ヨーロッパ演劇史研究の貴重な資料ともいえるテキストなので、該当する部分を翻訳し、あわせて仏訳テキストも掲載することにした。なお、トマスは俳優たちのことだけではなく、大道芸人の軽業や曲芸、動物の芸、奇形を売り物にする見世物、闘鶏や熊いじめ bear baiting などのスペクタクルにも関心を示し、かなり詳しく説明していたりもする。ただし、その部分は簡単な紹介にとどめ、翻訳も仏訳テキストも掲載せず、該当ページを示すにとどめた。

* * * * *

アヴィニオン Avignon : 1598年10月27日～12月24日

アヴィニオン滞在中、私はしばしば多くの外国人俳優を見たが、そのほとんどがイタリア人だった。なかでもヤン・ブラゲッタ Ian Bragetta あるいはジャン・ブラゲット Jean Braguette⁽⁴⁾ とかいう俳優は、掌球場 jeu de paume に演壇 estrade⁽⁵⁾ をつくり、2人の女優と4人の男優とともに、実に面白くおかしい劇 comédie⁽⁶⁾ を上演していた。何度も繰り返し、私はその芝居を見に行ったが、たいていは長びいて夜まで続いたので、最後はろうそくをつけねばならなかった。一度などは、いまでも覚えていますが、いろいろと愉快な話を演じたなかで、俳優の一人がありとあらゆる動物や鳥の鳴き声を、それも口に小さな笛をくわえただけで、見事に真似てみせたことがあった。彼はその笛を巧みにあやつり、口の中で動かしていたが、そうするのに舌を使うだけで、手は全く使わなかった。同じく、また別の折には、彼は幕の後ろで若い娘の首を切り、そのあと彼が幕を引くと、なんと首が長椅子の上に置かれた壺にのっていたのである。首を切られた女優はといえば、両腕をたらして長椅子の両側でぶらぶらと動かし、そうやってたしかに首が切られていることを示していた。もしもあのイタリア人俳優がそこで使った巧みな技を知らなかったら、おかしなトリックだと思わされてしまっただろう。だが実際には、いかなる魔術を使ったわけでもなかった。彼らはまた実にしゃれた田園劇、つまり羊飼いの劇も上演していた。彼らはパンタローネやザンニの役も優雅に演じていた、それも台詞だけでなく、踊りや身振りをまじえたり飛び跳ねたりしながら魅力たっぷりに演じたので、みなは笑い、喜んでそれを見ていた。彼らはイタリア語を話していたが、時折ラングドック言葉を少しまぜたりして客を楽しませていた。さらに、彼らの中には素晴らしい音楽家もいて、歌にあわせてハーブやヴィオールやリュートでうっとりするような音色を響かせたので、それに魅了された人も多かった。

それでもしばらくすると、彼らは客足が遠のいてきたのに気付いた。ところが彼らは、劇場とし

て使っていた掌球場のために非常に高い賃貸料を払わねばならなかった。それで彼らはシャンジュ広場 Place au Change と呼ばれるアヴィニオンの公共広場に場所を移し、そこに長い演壇を設け、昼食後、一人ずつ全員が壇上に登ってそこに並んで陣取った。彼らはしっかりと蓋がしまった木箱を壇上の脇に置き、その舞台で2時間ほどのあいだ、大勢の人が集まって肘をつき合わせるほどになるまで実に滑稽な劇を演じたが、観客の数はその時々で100人から500人くらい、場合によっては1000人にもなった。頃は良しとなったところで、座長のザンニが木箱を開けると、仲間の一人で博士の服を着て傍らにいた役者が甲高い声で、「その中にはどういう品物が入っているのだ？」とたずねた。それに応じてザンニは身を起こし、滔々とまくし立てはじめた。「わたしはトルコから戻ってきました。あの国で貴重な薬を買ってきましたし、効果てきめんの調合法もたくさん教えてもらいました。」そしてさらに、アヴィニオンの町については良い評判をいろいろと聞いておりますし（といいながら精一杯褒めちぎり）、わたしもずいぶんと良くしていただきました。ですから感謝のしるしとして、またアヴィニオンの皆様方の助けにもなればと思い、秘術と妙薬をおゆずりしようと考え次第でございます、と付け加えた。

そしてすぐさま木箱から鉛色の膏薬がいっぱい詰まった小箱を取り出し、容器を開けて中の薬を手や顔や体のさまざまな部分に塗り付け、匂いを嗅いでから、脇にいた様々な衣装をまとい仮面をつけた役者たち皆に、匂いを嗅いでよく調べてみるようにと水を向ければ、彼らは皆、これは素晴らしい、実に有り難い薬だと口をそろえて言うのである。ところが、いやそうではないと唱えるものがある。博士がザンニと論争をはじめ、彼を浮浪者扱いし、その薬はただのバターだと断言する。つまり、そんなのは信用ならんと言いつのるのである。ザンニもまたこれに応じて次から次へと反証を繰り出し、博士の理屈を粉碎する。こうしてザンニと博士はしばらくのあいだ言葉による戦いを面白おかしく繰り広げるが、最後は博士が黙り込み、ザンニの勝ちとなった。あとはもう俳優たちが実に魅力的に歌いながら楽器を奏でるばかりとなるのだが、それがまたなんとも楽しいのである。

そうこうした後、ザンニは木箱から商売ものである例の妙薬を詰めた小箱を数百個取り出し、売りつけにかかる。改めて大声で薬の効能を述べたてつつ、この小箱一つひとつが銀貨100クラウン *couronne* [=トゥール貨300リーヴル *livre tournois*] したのです、しかもこのために費やした苦労や労力は別にしてなのですよ、と言うのである。でも、今回はこの品物を一箱10クラウンでお売りしましょう、実にお安いですよ、私には高くつきましたが、お客様にとっては金銭的にもお得な買い物でございます。これをお求めになりたい方は、ハンカチにお金を包み、私の方に投げただけで結構です。そう彼が言っているあいだに、間奏曲としてほんの短い時間、あらたに楽器が演奏される。それから博士がまた口を挟み、「お前の言う一箱の値段は高すぎるぞ」と相棒のザンニに言うのである。だから、その半分にして一箱5クラウン [=トゥール貨15リーヴル] ではどうだ、と言ったところで一瞬沈黙し、それからさらに値段を半分に下げさせるが、それからまたその50%と言い、そうやってついには一箱1ステューバー *stüber* までいってしまった。1ステューバーとはつまりフランスのトゥール貨1スー *sou tournois* である[言いかえれば1クラウンあるいは1エキュ

écu の 60 分の 1 にあたり、またトゥール貨 1 リーヴルは 20 スーであるから、1 リーヴルの 20 分の 1 でもある。1 ステューバーといえ、スイスの 1 バツェン batzen の半分にあたるだろう。さてすると今度はザンニが声を荒立てる。すでに大幅な譲歩をしたつもりだ、私の薬にはそれだけの値打ちが十分ある。そうではあるが、アヴィニオン市民の皆様方のお気に召したくもある。「だから、10 クラウンではなく、5 クラウンでもなく、2 クラウンでも 1 クラウンでも半クラウンでもなく、10 スーでも 5 スーでも 2 スーでもなく、この際ですから思い切って、この小箱一つだけならたったの 1 ステューバー [=トゥール貨 1 スー] といたしましょう！ 一つほしい方は、私の方にハンカチを投げてくださるだけで結構です。最初にそうしてくださった方には一箱ただで差し上げましょう。」それを聞いて客たちはすぐさま演壇に向かって、1 ステューバーあるいは 1 スーを中に入れて結んだハンカチを一斉に投げる。それを受けるや否や、ザンニと博士は金を取り出してからハンカチに薬箱を包み、あとは送り主一人ひとりに薬を包んだハンカチを返すだけである。そして時々、御婦人方がその箱を受け取る時には、俳優たちはそこに恋文を結びつけ、いづどこでお会いいただけるか尋ねるのだった。こうした商売では、この類のことがよく行われるのである。

このイタリア人俳優たちは、人から金を巻き上げるため、いろいろなことをする。数百個の小箱を売った後も、ザンニには客に「売りつけ」ねばならないものがまだそれ以上にある。だからもっと努力しなければならないのだ。ショーの最後で、彼はもう一度観客にお知らせする。「一箱ほしいという方は、どうぞ私にお金を投げてください。もう 1 ダースほどしか残っていませんし、おゆずりできるものはもうこれ以上はありませんから。それから、明日はまた別のものをお売りすることにします。」

次の日の昼食後、イタリア人たちはまた演壇に登る。壇上には 7 人いて、まずは楽しい劇を演じ、それからザンニがこれから売ろうとする品物を見せる。それはたぶん菌磨き粉で、良い匂いがする—ただし粉を包んでいる紙から匂っているだけだが。それから、痒や足の魚の目に効く薬だとか、ヴェネチアの石鹸だとか、歯の痛みに効くものだとか、香りがする粉だとか、香水だとか、そういった類の品物である。博士とザンニはそれらのことで互いに言い合い、それからザンニは商品を並べて、どれも一つ 1 ステューバー [=トゥール貨 1 スー] で売るのである。

時折、彼らの手品のことが印刷された反故紙を売りに出すこともある。それから、皆の前で、客をもっとも笑わせるような手品を演じて見せる。最後に、その反故紙をトゥール貨 1 スーで売るのに成功すると、ザンニはただ次のようにだけ言う。「ここに書かれていることは大変難しいので、読み取ることができないかもしれません。ですから、もしもそこに書いてあることがどうしてもわからないという方は、私の宿までどうぞおいでください、ご説明いたします。さらに、ほかの素敵な秘密の手品も 1 ペニヒ pfennig でお教えいたしましょう。」

こうした方法とか似たようなやり方で、彼らはなにがしかの金を儲けたりすることがあるが、そういうことはめったに起こらない。というのも、彼らには浪費癖があるからだ。そして、もう稼げなくなりはじめたとわかったとき、彼らはそこを引き払い、別の町に行く。そうやって、彼らは世界のあちこちを旅し、浪費を慎む。貯金しようと思えば、時には実際にながりの金をためることも

できるのである。こうした出来事はたくさんあって、他にも素晴らしい娯楽 *jeux* やダンスもここでは行われるが、すべてを書き記すことは不可能である。

Pendant mon séjour en Avignon, j'ai souvent vu jouer nombre de comédiens étranges[*sic*], la plupart du temps italiens ; en particulier un certain Ian Bragetta, autrement dit Jean Braguette : il mettait en scène, sur une estrade, dans une salle du jeu de paume, des comédies très drôles et divertissantes, avec deux actrices et quatre acteurs. À plusieurs reprises, j'ai assisté à ce spectacle : il se prolongeait en général jusque dans la nuit, si bien qu'on devait finir la soirée aux chandelles. Une fois, je m'en souviens, entre autres épisodes récréatifs, l'un de ces comédiens parvenait à imiter le cri de toute sorte de bêtes et d'oiseaux, rien qu'avec un petit sifflet qu'il avait dans la bouche. Il manœuvrait le sifflet et le faisait bouger à l'intérieur de la cavité buccale ; il s'aidait, pour cela, de sa seule langue et sans le secours des mains. *Item*, en une autre occasion, il coupa la tête d'une jeune fille derrière un rideau ; ensuite il a tiré le rideau et voilà que la tête se tenait bien droite dans un pot, lui-même posé sur un banc ; quant à l'actrice décapitée, elle laissait pendre ses deux bras qu'elle agitait de chaque côté du banc, de sorte que le cou apparaissait bel et bien tronqué. Si l'on ne connaissait pas l'astuce technique que l'Italien avait employée pour la circonstance, on était obligé de croire qu'il y avait là un truc tout à fait incorrect. Et pourtant, dans les faits, nulle sorcellerie n'était à mettre en cause. Ils donnaient aussi de très jolies pastorales, autrement dit comédies de bergers. Ils interprétaient également d'une façon gracieuse les rôles de Pantalon et de Zani, non seulement avec des mots, mais aussi sur le mode charmant : ils s'exprimaient par des danses, des gestes et des sauts — tout le monde riait et regardait cela avec plaisir. Ils parlaient en italien et aussi, de temps en temps, ils assaisonnaient leurs discours d'un peu de langage languedocien. On trouvait parmi eux, en outre, d'excellents musiciens, grâce à quoi ils pouvaient accompagner leurs chants, en un style délicieux, au son de la harpe, de la viole et du luth. Nombreux étaient ceux qui s'émerveillaient.

Au bout de quelque temps, ils se sont aperçus que la foule finissait quand même par déserrer leurs spectacles de comédie. Or ils étaient obligés de payer un loyer très cher pour le jeu de paume qui leur servait de théâtre. Ils se sont donc installés sur la place publique d'Avignon, appelée place au Change. Ils y ont disposé une longue estrade, sur laquelle ils se sont postés, après le repas de midi, tous ensemble sur les planches, l'un près de l'autre ; ils ont placé une caisse bien close, à leurs côtés, sur cette même estrade. Pendant un couple d'heures, sur cette scène, ils ont joué une comédie très drôle, jusqu'à ce qu'ils constatent qu'une grande foule de peuple était rassemblée là, au coude à coude ; on y dénombrait, selon les cas, entre cent et cinq cents personnes, ou même mille spectateurs. À ce moment, Zani, qui était leur patron, a ouvert la caisse et l'un de ses camarades, habillé en docteur, qui se trouvait debout à ses côtés, l'a interrogé d'une voix claironnante : « Qu'est-ce qu'il y a là-dedans, en fait de marchandises ? » En réponse, Zani s'est redressé, et il a commencé à débiter un beau discours : « Je reviens de Turquie ; dans ce pays, j'ai acheté de précieux médicaments et l'on m'a enseigné quantité de recettes occultes. » Il ajoutait qu'on lui avait tenu tant de favorables propos sur cette ville d'Avignon (dont il fit en même temps le plus pompeux éloge) et qu'il en avait reçu tellement de bienfaits ! Il voulait donc, en signe de gratitude, et pour venir en aide aux Avignonnais, leur communiquer les secrets de son art comme de

ses remèdes.

Et, sans plus tarder, le voilà qui tire de sa caisse une petite boîte pleine d'onguent plombé ; il ouvre ce récipient, se frotte les mains, le visage et d'autres endroits du corps avec cette pommade, la flaire ; il en donne aux personnes qui sont à ses côtés, toutes déguisées et joliment masquées, pour qu'elles la sentent et l'inspectent : elles affirment toutes qu'elle est excellente, précieuse. Mais une voix discordante s'élève, quand même ! C'est le docteur qui se met à polémiquer contre Zani, le traite de vagabond, lui déclare que sa pommade, c'est simplement du beurre ; bref, il la discrédite le plus possible. Zani a[*sic*] son tour reprend la parole, et démolit les raisonnements de son adversaire doctoral avec une pléthore d'arguments. Zani et le docteur continuent ainsi pendant un bon moment leur joute verbale l'un contre l'autre, d'une façon tout à fait grotesque, jusqu'à ce qu'au bout du compte le docteur se taise, et Zani finit par avoir le dessus. Ils n'ont plus alors qu'à jouer de leurs instruments de musique, d'une manière fort charmante, tout en chantant : c'est un délice.

Sur ces entrefaites, Zani sort de sa caisse quelques centaines de petites boîtes de cette pommade dont il tient boutique ; il a l'intention de les vendre. Il entreprend d'abord de vanter à grands cris sa pommade. Chacune des petites boîtes à pommade lui a coûté cent couronnes [= trois cents livres tournois], affirme-t-il, non compris le travail et la peine qu'il a dû fournir à ce propos. Mais il annonce que, maintenant, il veut bien vendre cette marchandise à dix couronnes la boîte. C'était très bon marché, car cela lui avait coûté très cher, et le client pouvait donc s'y retrouver tout à fait, financièrement parlant. Celui qui voulait acquérir une boîte n'avait qu'à lui lancer son mouchoir avec l'argent dedans pour l'emplette. Entre-temps, nouvel intermède de musique instrumentale, juste un petit moment. Et puis le docteur reprend la parole : « Ce que tu demandes pour une boîte est trop élevé », dit-il à son compère Zani. Et du coup le docteur veut encore couper la poire en deux, à raison de cinq couronnes la boîte [= quinze livres tournois], puis il se tait un court instant, et le voilà qui fait baisser d'abord le prix de moitié ; puis à nouveau de 50 %, et ainsi de suite, jusqu'à ce qu'on en arrive à un *stüber* la boîte ; un *stüber*, c'est-à-dire un sou tournois français [en d'autres termes la soixantième partie d'une couronne — ou d'un écu, cela revient au même ; ou encore la vingtième partie d'une livre tournois, laquelle vaut vingt sous]. Un *stüber* ou un sou tournois, ce qui ferait la moitié d'un *batzen* helvétique. Et voilà Zani qui à son tour hausse le ton. Il déclare qu'il pense avoir déjà fait beaucoup de concessions, et que ses pommades valent bien ça. Et pourtant il veut plaire à la bourgeoisie d'Avignon. « Donc ce ne sera pas dix couronnes, ni cinq couronnes, ni deux, ni une, ni une demi-couronne, ni dix sous, ni cinq sous, ni deux, mais bel et bien, dit-il, un seul *stüber* [= un sou tournois] pour une seule de mes petites boîtes ! Quiconque en désire une, il n'a qu'à me jeter son mouchoir. Le premier à le faire aura une boîte gratuite. » Aussitôt les spectateurs jettent leurs mouchoirs en masse sur l'estrade, dans lesquels ils ont noué le susdit *stüber* ou sou. Dès réception, les deux compères récupèrent les sous, puis ils enveloppent la boîte à pommade dans le mouchoir, et ils n'ont plus qu'à retourner le mouchoir ainsi lesté à chaque envoyeur. Et puis, de temps en temps, quand des dames réceptionnent une boîte de ce genre, les comédiens y ont attaché un billet doux pour savoir où l'on peut les rencontrer, et à quelle heure. Il y a beaucoup de telles pratiques utilisées dans ce genre d'opération.

Tous ces Italiens ont quantité de choses à faire pour exploiter les gens. Quand Zani a vendu quelques centaines de ses boîtes, il lui en reste encore davantage à « refiler » aux clients ; il est donc obligé de faire plus d'efforts. En fin de séance, il avertit les spectateurs encore une fois : « Que celui qui désire une boîte me lance son paquetage de monnaie, car il ne me reste qu'une douzaine de ces boîtes et ensuite il n'y en aura plus de disponible. Et puis, demain, je vendrai autre chose. »

Le lendemain, après le repas de midi, les Italiens montent de nouveau sur l'estrade, « en banque ». Ils sont au nombre de sept sur l'estrade : d'abord, ils jouent une belle comédie ; ensuite, voilà Zani qui exhibe les denrées qu'il va mettre en vente : ça peut être une poudre dentifrice, et qui sent bon — le parfum ne provenant pourtant que du papier qui contient la poudre ; ou encore c'est un remède contre les verrues, ou contre le cor aux pieds ; ou du savon vénitien ; ou des produits contre les maux de dents, ou de la poudre parfumée, ou des eaux de senteur, ou des produits du même genre. Le docteur et Zani disputent l'un avec l'autre à leur propos ; ensuite, Zani étale ces marchandises et il les vend communément à raison d'un *stüber* [= un sou tournois] pour chaque article.

De temps à autre, ils mettent en vente également des paperasses imprimées sur lesquelles sont décrits leurs tours de passe-passe ; et puis, devant tout le monde, ils font une démonstration de celles qui prêtent le plus à rire. Enfin, quand ils ont réussi à vendre ces papiers pour un sou tournois, Zani se borne à déclarer : « De telles écritures peuvent être trop difficiles à déchiffrer. Alors, si quelqu'un ne parvient pas à comprendre ou à apprendre ce qu'il y a là-dedans, cette personne n'a qu'à se rendre dans mon auberge, et là je lui expliquerai la chose ; et par ailleurs je lui révélerai bien d'autres tours de passe-passe, beaux et secrets, moyennant un pfennig. »

Avec ces méthodes et d'autres du même genre, il leur arrive de gagner quelque argent, bien que cela se produise rarement, car ils ont tendance à beaucoup gaspiller ; et quand ils voient que leurs artifices commencent à ne plus payer, ils se tirent de là et s'en vont dans une autre ville. Alors ils voyagent de par le monde, et ils s'abstiennent de gaspillages monétaires : s'ils veulent faire des économies, ils peuvent parfois effectivement mettre pas mal d'argent de côté. Il y a beaucoup d'événements de cette sorte ; d'autres jeux merveilleux ou des danses y ont lieu, mais on ne peut pas tous les décrire par la plume.

— *Le Siècle des Platter II*, p. 386-391.

バルセロナ Barcelona : 1599年1月28日～2月4日

バルセロナで特筆すべき娯楽の一つが観劇である。そのために特別な場所すなわち劇場 *des theatra* がつくられ、皆がそこで演じられる劇を見ることができ、俳優たちは演壇上で自分たちの仕事をする。客が大勢いるときは、救貧院 *hôpital* に収容されている身寄りのない少年たちがゆったりと座れる椅子をたくさん運んで来て、座席がない地面に据える。身分のある人々はそこに座り、少なくとも一人あたり半リアル *demi-réal* 払うが、これは1バツェン *batzen* より少し高い額である。なかにはそれよりも高い額を払う人たちもいる。それが1年間まとまると非常に大きな収入となり、受領者である救貧院はその金をもっとも有効に使う。というのも、救貧院の資産は椅子だけではなく、劇場が

らも賦課金 *redevance* を徴収するからである。劇やその他の娯楽が演じられているあいだにも施しとして金が集められるが、こうした楽しみに払う金があるのなら、貧しい人々のことも忘れてはならないというのがその趣旨である。

バルセロナには実際に非常に大きくて立派な救貧院がある。私はそれを見て感嘆した。まさに壮麗な建物である。しかし、人から教えてもらったのだが、この施設には安定した確実な収入源がなく、またスペインの他の施設も同様とのことである。バルセロナでも他の場所でも、こうした施設はいずれも私が今しがた触れたような劇の収入でかなりの額を稼ぐ。残りは上流階級に属する金持ちたちが毎日のように大量の肉やパンやぶどう酒や金を提供するので、これら救貧院には足りないものはなく、あり余るほどである。

演劇活動に使われるこれらの場所で、私はスペイン人によって演じられるしゃれた劇をいくつも見た。劇はありとあらゆる種類の不可思議な話を題材とし、実に巧みにつくられている。ある日、こうした劇を見に集まった観客のうちの誰かが、高価なダイヤモンドがはめ込まれている指輪をなくすということがあった。そこで、指輪を見つけ出すために、全員が手を握ったままおがくずを入れた手桶に手を入れ、それから手を開いて桶から出すようにと、厳しいお達しがあった。そして、全員がそれをした後、指輪は手桶の底で発見されたのである。

À Barcelone, l'un des divertissements les plus marqués, c'est le spectacle des comédies. Pour elles on a construit des lieux spécialisés, autrement dit des *theatra*, dans lesquels tout le monde peut voir les pièces qu'on y joue, et la façon de les jouer ; les comédiens font leur métier d'acteurs sur une estrade. Quand il y a beaucoup de monde, les jeunes garçons orphelins qui sont pensionnaires de l'hôpital apportent beaucoup de sièges confortables et les installent sur le sol, là où il n'y a pas de siège. Les gens distingués s'assoient là-dessus ; ils paient au minimum un demi-réal par personne, c'est-à-dire un peu plus qu'un *batzen* ; et même plusieurs déboursent une somme supérieure. Tout cela, en une année, constitue un très gros revenu ; l'hôpital, qui en est récipiendaire, fait le meilleur usage de cet argent ; car la fortune des hôpitaux n'inclut pas seulement les sièges des spectateurs, mais aussi les théâtres eux-mêmes, sur lesquels ils prélèvent une redevance. Pendant les représentations théâtrales des comédies et autres divertissements du même genre, on fait également la quête au titre des dons d'aumône ; le but de ces collectes monétaires étant de bien rappeler aux spectateurs que, si l'on n'hésite point à dépenser de l'argent pour de tels spectacles, il ne faut pas pour autant oublier les pauvres.

À Barcelone, il y a en effet un hôpital, qui est très grand, très bien bâti. Je l'ai vu et je l'ai beaucoup admiré : il est vraiment somptueux. Et pourtant, on m'a fait savoir que cette institution n'a pas de revenus constants et assurés ; il en va de même des autres établissements hospitaliers en Espagne. Les uns et les autres, à Barcelone comme ailleurs, gagnent pas mal d'argent avec les recettes des spectacles auxquelles je viens de faire allusion. Pour le reste, les gens riches, appartenant à la haute société, leur fournissent journellement une si grande quantité de viande, de pain, de vin, d'argent, etc., que dans ces hôpitaux on ne manque jamais de rien, et même il y a du surplus.

Dans ces places consacrées aux activités théâtrales, j'ai vu de jolies comédies jouées par des Espagnols.

Elles sont pleines de finesse, et fondées sur toute espèce d'histoires extraordinaires. Il est arrivé certain jour qu'un diamant précieux, monté sur un anneau, s'est perdu dans une assemblée de spectateurs de cette espèce de représentation théâtrale. Afin de le récupérer, on a incité tout le monde avec des paroles menaçantes à plonger la main fermée dans un baquet qui contenait du son, et ensuite ces mêmes personnes l'ont retirée ouverte. À la fin des fins, quand tout le monde y est passé, l'anneau s'est retrouvé au fond du baquet.

— *Le Siècle des Platter II*, p. 447-448.

[このすぐ後に、段落を新たにして、バリユタン Barutin という名のフランス人が、綱の上で見事な曲芸を演じて見せる様子が詳しく述べられている。— *Ibid.*, p. 448-450]

アンジェ Angers : 1599年5月22日

[トマスは、アンジェで5匹の猿を連れて芸人が、猿たちに踊りやさまざまな芸をさせるのを見たことを記している。— *Le Siècle des Platter III*, p. 47.]

パリ Paris : 1599年7月28日～8月10日

[以下のテキストは8月7日と8月8日の日付がある文章の間に収められている。トマスは8月7日にグレーヴ広場 place de Grève で見た処刑のことを書いた後、パリ市庁舎 Hôtel de Ville やブルボン公、ヌヴェール公、ロレーヌ公、コンデ公などの邸宅について語り、それに続いてオテル・ド・ブルゴーニュ座 Hôtel de Bourgogne で見た劇のことを書いている。]

[...] オテル・ド・ブルゴーニュ座では、アンリ4世国王がヴァルラン Valeran という俳優⁽⁷⁾を抱えている。彼は毎日、食後に、フランス語の韻文による楽しい劇を演じている。劇が終わるや否や、彼が出てきて笑劇を披露し、さまざまな人々をやり玉にあげてゆく。そこで取り上げられるのはパリや他の場所で起こる色恋沙汰や奇抜な話である。彼はそれを巧みに、目に見えるように語るのだ！ これをするために、彼は何人かの俳優に共演させる。ヴァルランは韻文ではなく散文で表現する。彼の語りには実に滑稽な言い回しや冗談がつめこまれているので、みな大笑いせずにはいられない。とくにそこで演じられていることが、どういう事件か、あるいは誰に起こったことかなど、すでに前もっていくらか知っている場合はなおさらである。というのも、パリで起こるおかしなことは何であれ、露見するやいなや、ヴァルランに伝えられるからである。それを彼は色事の劇に仕立てる。すると、最初の出し物であるもつとまじめ劇が終わった後に演じられるこの卑俗な笑劇を目当てに、大観衆が劇場に押しかけるのである。そのうえ、彼には即興の才能が大いにあって、最初に演じる劇にも即興を盛り込むのである。彼は劇を一段高くなった演壇で演じる。そのまわりには壁掛けがかけられている。劇場は非常に広い。観客のうち、庶民は半額を払うが、立ったままでいなければならない。反対に、倍額を払う客はギャラリーやバルコニーのボックス席に登ることができる。そこで彼らは座ることができるし、立ったままでいてもいいし、あるいは手すりに肘をつけて見下ろせば舞台が実によく見えるのである。ご婦人たちが先に触れたヴァルランの芝居を見に来たとき陣取るのもそこである。毎日さまざまな数の人々が劇を見に、また聞きに、この劇場に

やってくる。劇は実に長い時間、夜になるまで続くので、松明がともされる頃になってようやく終わることもしばしばである。しかも、この町には、常時、他の俳優たちや軽業師、大道芸人、曲芸師、芸人、楽師たちが大勢いる。彼らはほんとうに素晴らしいことをやってのけ、妙技を披露するのだ。彼らはある通りから別の通りへと絶え間なく移動する。一日のあいだ、時には何日ものあいだ、町のある地区にいる。彼らはそこに現れ、手を打ちならして客を集め、そうやって金を集めるのである。そしていずれ、その地区の人々からもう十分金を搾り取ったと思うときがやってくる。すると彼らはパリの別の地区に行き、以下同じように、そうやってたんまり金を稼ぐまでとどまるのである。私はパリで、こうした類の人間たちについては、実にたくさん目にし耳にした。というのも、パリの人々は何か変わったことがないかと絶えず待ち構えているので、この好奇心の塊のような市民たちはバドー badauds [原文でフランス語が使われている] と呼ばれている。この首都の人口は大変な数である！ だから、どんな人であれ、したり見せたりできるような何か変わった奇妙なものをもっている人間なら、このあたりまでやってきさえすれば、あとは急いでパリに行き、あれやこれやの方法で金を集めればよいのである。

こうした人々のほかに、国王の俳優たちの競争相手であるイタリア人やイギリス人の俳優たちもパリにやってきて、彼らのうちの誰それかと協力して演じたりする。また時には、どこか特別な場所を借りて劇を上演することもある。そのことは私自身が他のいくつかの場所で実際に見て聞いたことなので、保証してよい。

[...] À l'hôtel de Bourgogne, le roi Henri IV a engagé un comédien nommé Valeran. Il joue tous les jours, après le repas, une amusante comédie en vers français. À peine est-elle finie... le voilà qui se met à débiter une farce où il médit du tiers et du quart ; et cela à propos des intrigues d'amour ou de maquereautage et autres anecdotes farfelues qui se déroulent à Paris ou ailleurs. Il raconte ça avec art, avec précision ! Il se fait accompagner, pour ce faire, par plusieurs acteurs. Valeran ne s'exprime pas en vers, mais en prose. Ses récits sont entrelardés de blagues, de tours tellement comiques qu'on ne peut pas s'empêcher de se fendre la gueule, surtout quand on dispose déjà de quelque connaissance antérieure, s'agissant de l'événement ou de la personnalité à qui c'est arrivé. Car tout ce qui se passe d'extraordinaire à Paris, à peine c'est divulgué, on le fait savoir à Valeran. Il en tire une pièce théâtrale de gaudriole. Une énorme foule de peuple accourt alors dans sa salle de spectacle, afin de pouvoir entendre la grosse farce en question, après la fin d'une comédie plus sérieuse qui a ouvert la représentation. En outre, il a beaucoup de facilité pour ajouter des improvisations qu'il interpole dans cette initiale comédie, elle aussi. Il joue ses pièces sur une estrade surélevée, autour de laquelle sont accrochées des tapisseries. Ça se passe dans une très grande salle. Parmi les spectateurs, les gens du commun paient moitié prix, mais doivent rester debout. En revanche, les spectateurs qui s'acquittent d'un double tarif, on leur permet de monter dans diverses galeries et balcons. Là, ils peuvent s'asseoir, ou rester debout eux aussi, ou encore ils s'accourent sur une rampe, et comme ça ils ont une magnifique vue plongeante sur la scène. C'est là aussi que les dames ont l'habitude d'être spectatrices du Valeran précité. Chaque jour vient un monde fou dans ce théâtre pour voir et entendre les comédies ; elles durent jusque fort avant dans la nuit, si bien qu'à

mainte reprise elles ne se terminent qu'à la lumière des torches. Par ailleurs, il y a aussi en permanence dans cette ville quantité d'autres comédiens, saltimbanques, jongleurs, ingénieurs, artistes, musiciens... Ils font de vraies merveilles, ou se livrent à des exhibitions fort ingénieuses. Ils vont sans arrêt d'une rue à l'autre. Pendant un jour ou même plusieurs journées, ils sont dans un quartier de la ville. Ils s'y produisent, ils tapent des mains pour attirer le client et, du coup, ils ramassent des pécunes. Un moment vient où ils pensent que les habitants du secteur ont suffisamment craché au bassin. Dès lors, ils se rendent dans un autre quartier de Paris, et ainsi de suite, jusqu'à ce qu'ils aient ramassé de la sorte une grosse somme monétaire. J'en ai vu et entendu à Paris de très nombreux, quant à ce genre de personnages. Car les Parisiens sont sans cesse à l'affût des choses étonnantes, si bien qu'on donne à ces citadins, curieux de tout, le nom de badauds [en français dans le texte]. La population de cette capitale est tellement vaste ! Et c'est la raison pour laquelle quelque individu que ce soit qui a quelque chose de bizarre, d'étrange à faire ou simplement à montrer, eh bien ! ce quidam, pour peu qu'il vienne dans la région, n'a rien de plus pressé que de se rendre à Paris, et d'y ramasser de l'argent d'une façon ou d'une autre.

Outre ces gens-là, les uns comme les autres, il vient très souvent aussi, dans la ville, des comédiens italiens et anglais, émules des comédiens du roi et qui jouent en collaboration avec tel ou tel d'entre eux ; ou bien parfois ils font des réservations d'emplacements spéciaux pour leurs productions, comme je peux en témoigner pour les avoir entendus et vus, en effet, dans d'autres endroits.

— *Le Siècle des Platter III*, p. 135-137.

[このテキストのすぐ後、段落を新たにして、大学地区 le quartier de l'Université で見たスペイン人の曲芸師のことがかなり詳しく紹介されている。その後、8月8日の日付ではじまる新たな段落をはさんで、次の段落ではサン・ジャック通り rue Saint-Jacques の旅籠 auberge で、先天性奇形で腕がなく足も膝から下しかない女が、足を使って針に糸を通したり、さいころを振ったり、字を書いたりするのを見たことなどが書かれている。— *Ibid.*, p. 137-138.]

ロンドン London : 1599年9月18日～26日

9月21日、軽食を終えてから、われわれは午後2時ごろ船に乗った。友人たちと私はテムズ川を横切る。藁ぶき屋根の家で初代皇帝ユリウス・カエサルの悲劇を上演していた⁽⁸⁾。15人ほどの役者たちがいて、大変上手に演じていた。劇が終わると、彼らは習慣に従い、じつに優雅に踊った。出てくる人数は常に同じで、二人の男性と、別の同じく二人の男性、ただし女性に扮している。彼らはいずれも見事なバレエを踊っていた。

別の折に、これまた食後に、私の記憶では私たちの宿からそう遠くない城壁外の、たしかビショップズゲート Bishopsgate のあたりだったが、ひとつの劇を見た。彼らはあるとあらゆる国民を演じていたが、それらの国民とイギリス人とのあいだで、一人の娘を手に入れるために戦いが繰り広げられていた。毎回、イギリス人が勝った。イギリス人はこれらすべての国民に対して勝利を得たのだが、ドイツ人だけには勝つことができず、ドイツ人が戦利品として娘を手に入れた。ドイツ人はこ

の女性の傍らに座り、従僕と一緒にしこたま酒を飲んだ。二人はそうやって酔っぱらい、従僕は主人の頭に靴を投げつけたりした。そして二人とも寝入ってしまった。そうこうするあいだに、例のイギリス人が天幕の中に入っていき、ドイツ人から戦利品つまり娘を奪った。今度はチュートン人⁽⁹⁾がしてやられたわけだ！ 最後に彼らはイギリス風とアイルランド風のダンスを上手に踊った。毎日午後の2時から、二つの劇、ときには三つの劇をそれぞれ別の場所で演じている。競争と嘲笑！それぞれが相手をけなし合い、一番うまくやった者が勝つということだ！ 一番うまく演じた劇場が、一番多く観客を集める。演じられる場所は、舞台が高くつくられていて、見に来てきた人々全員が芝居を絶対に見逃さずにすむようにできている。しかしながら、ギャラリー席や様々な見物席があって、そこに席をとれば快適に楽しめる…… だから値段も高いのだ。下で立ったままの観客はたったの1ペニヒ pfennig あるいはイギリスの1ペニー penny だけ払えばよい。だが、座れる席をという客は別のドアから入って、そこでもう1ドニエ denier [= 1ペニー] 余分に払うことになる。また、もしもクッションつきの椅子にゆったりと座れる快適な場所を望むなら、そこからは舞台上で演じられていることを完全に見ることができるし、また人から眺められ見られることにもなり、これもまた無視できないことではあるが、その場合は第三のドアから入り、さらにもう1ペニー余分に払うことになる。劇が演じられているあいだ、客席では飲み物や食べ物を売りに回る。それがほしければ金を出して手に入れ、元気をつけることができる。俳優たちの衣装はどうか？ 非常に高価でこの上なく華やかである。実際に、イギリスの習慣では、貴族やナイトが死ぬと、彼らのほとんど最上の衣服は彼らに仕えていた召使いたちに与えられる。しかし、召使い風情がそのような高価な服を身に着けるのは具合が悪いので、召使いたちはその立派な衣服を俳優たちに全部安値で売るのである。

この国では、人々は日々芝居を楽しんで時間を過ごすのである！ それを確かめるには、役者たちが演じている真っ最中に劇場に行くだけで十分である。

Le 21 septembre, ayant terminé le casse-croûte, nous nous sommes embarqués vers deux heures de l'après-midi. Avons traversé la Tamise, mes amis et moi. Dans une maison couverte en chaume, on donnait la tragédie du premier empereur Jules César. Il y avait là une quinzaine d'acteurs qui jouaient avec beaucoup de talent. Quand la pièce fut terminée, ils dansèrent, selon leur coutume, de façon très gracieuse. L'effectif était toujours le même : soit deux danseurs mâles, et deux autres *idem*, mais déguisés en femmes. Merveilleux ballet qu'ils dansaient les uns avec les autres.

En une autre occasion, c'était également après le repas, dans le faubourg non loin de notre auberge selon mes souvenirs, ça devait se situer à la Porte-Évêque (Bishopsgate), j'ai vu le spectacle d'une comédie ; ils y présentaient des nations de toutes sortes : entre elles et un Anglais, il y avait combat pour avoir une fille. À chaque fois, c'était l'Anglais qui gagnait. Victoire sur toutes ces nations, à l'exception d'un Allemand, qui obtenait la fille en tant que trophée de sa lutte. Il s'est assis à côté de cette femme, et il a bu tant et plus en compagnie de son valet. Les deux se sont saoulés de la sorte, et le valet a jeté sa chaussure à la tête de son maître. Et puis tous deux se sont endormis. Entre-temps, l'Anglais est entré sous la tente et il a enlevé

à l'Allemand le prix de sa victoire, je veux dire la fille. Au tour du Teuton d'être dupé ! À la fin, ils ont très joliment dansé, en style d'Angleterre et d'Irlande. Tous les jours, à partir de deux heures de l'après-midi, on joue deux comédies, quelquefois trois, dans des lieux différents. Compétition et moquerie ! C'est pour que chacun tâche de faire la nique à l'autre, et que le meilleur gagne ! C'est le théâtre où l'on joue le mieux, qui attire le plus de spectateurs. Le lieu de la représentation est bâti de telle manière que les acteurs jouent sur une scène surélevée et tous ceux qui sont venus pour voir ne perdent absolument rien du spectacle. Et pourtant il y a des galeries et des emplacements divers, où les sièges sont plus confortables, plus plaisants... c'est la raison pour laquelle ils coûtent plus cher. Le spectateur qui reste debout, en bas, ne débourse qu'un seul pfennig ou penny d'Angleterre. Mais celui qui veut une place assise, on le fait entrer par une autre porte où il paie encore un denier [= un penny] supplémentaire. Notre homme désire-t-il maintenant, assis sur des coussins, jouir de l'endroit le plus confortable, d'où l'on peut voir à la perfection ce qui se passe sur scène et aussi être regardé, être vu, ce qui n'est pas non plus à négliger ; en ce cas, il se doit de passer par une troisième porte, et il verse pour la circonstance un penny de plus. Pendant que se joue la comédie, on fait circuler dans l'auditoire boissons et nourriture ; ceux qui le souhaitent peuvent ainsi en avoir pour leur argent et refaire leurs forces. L'habillement des comédiens ? Très précieux, décoratif au possible. De fait, une coutume anglaise veut qu'à la mort de seigneurs distingués ou de chevaliers, leurs habits *presque* les plus beaux soient offerts à la domesticité de ces messieurs. Mais, comme il serait inconvenant que cette valetaille porte une défroque de si grande valeur, les laquais vendent ces beaux habits aux comédiens, le tout pour pas cher.

Le temps qu'on passe en ce pays à se régaler quotidiennement des représentations de comédies ! Il suffit pour s'en rendre compte d'assister au jeu des acteurs, quand ils sont en pleine action théâtrale.

— *Le Siècle des Platter III*, p.363-364.

[このすぐ後、段落を新たにして闘鶏のことが、さらに次の段落では熊や牡牛と狼犬を闘わせる見世物のことが詳しく紹介されている。— *Ibid.*, p. 364-367.]

注

- (1) 「フランス演劇史研究資料：トマス・ブラッター『パリ描写』と1599年のパリ」、17世紀仏演劇研究会『エイコス』第8号、1994年、25-51頁。この時紹介した仏訳版テキストは以下の通り：Thomas Platter le jeune, *Description de Paris*. Traduction de l'allemand par L. Sieber. Achevée par MM. Weibel avec notes de E. Mareuse. Extrait des *Mémoires de la Société de l'Histoire de Paris et de l'Île de France*, Tome XXIII (1896).

なおThomasの読み方だが、現代ドイツ語では「トーマス」と長くのびすが、古い時代は「トマス」と短く発音したとのことである。それで、本稿ではThomasのカタカナ表記は「トマス」で統一することにした。なお、Thomasの読み方については長崎外国語大学教授田口武史氏に教えていただいた。田口氏に感謝しつつ付記したい。

- (2) 父トマスについては、彼が最晩年にまとめた自叙伝の邦訳『放浪学生プラッターの手記 スイスのルネサンス人』（阿部勤也訳、平凡社、1985年）を参照されたい。なお阿部氏が底本とした刊本の校訂者アルフレート・ハルトマン Alfred Hartmann は父トマスの生年を疑問視し、1499年より「8年ほど遅らせ、少なくとも1507年2月とする方をとるであろう」（同書、159-160頁）と注で記している。なお、ル・ロワ・ラデュリは文献表でハルトマンの刊本に「基本文献」fondamental とカッコ書きしているが、父トマスの生年についてはとくにコメントせず、ただ「『幼いトマス』は実際にそこ〔戸口注：スイス南部の州ヴァリス Wallis（フランス語ではヴァレ Valais）の寒村グレッヒェン Grächen〕で、1499年に、極貧のうちに生まれた...」«Petit-Thomas» y était en effet né, l'an 1499, dans une extrême pauvreté... (*Le Siècle des Platter, Tome I*, p. 28) とだけ記している。
- (3) 『放浪学生プラッターの手記』、146頁。
- (4) イタリア語ではジョヴァンニ・ブラゲッタ（あるいはブラケッタ）Giovanni Braghetta (ou Brachetta) となるだろう。Voir *Le Siècle des Platter II*, p. 653, note 391 de la page 386.
- (5) 本稿で紹介する仏訳版テキストでは、「舞台」scène の代わりに「演壇」estrade という語が使われていることが多い。
- (6) comédie は狭義には「喜劇」を意味するが、かつてはジャンルに関係なく「劇」一般の意味で使われていた。本稿では comédie は「劇」と訳すことにする。
- (7) ヴァルラン・ル・コント Valleran Le Conte（生没年代不詳）のこと。
- (8) シェイクスピア『ジュリアス・シーザー』と考えられているが、確証はないようである。
- (9) ドイツ人のこと（軽蔑的に）。